

# テクノス通信 VOL. 26 Jul.2011

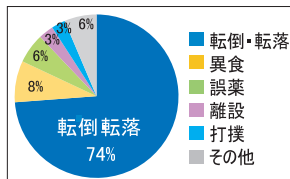


## 「高齢者施設での離床センサー設置と活用」

近年高齢者施設では、転倒・転落事故が増加傾向にあると言われています。今回は、高齢者施設の中でも最近急速に増えつつあるユニット型施設※に注目し、転倒・転落事故の発生要因と、離床センサーを使用した対策をご紹介します。

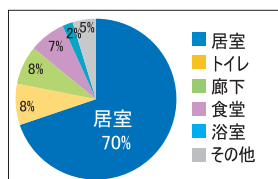
※自立生活を保障する居室と少人数で家庭的な雰囲気の中での共同生活室により構成されるユニットを単位として運営され、生活単位と介護単位を一致させたユニットケアを行う。入居定員は10人以下。

### ■ある高齢者施設(ユニット型)における転倒・転落発生状況



当社調べ

この高齢者施設では施設内で発生した事故の内、70%以上を転倒・転落が占めていました。これは、病院と異なり手術や投薬など医療行為に伴う事故がない事と、利用者の全てが生活の中で何らかの介護が必要な高齢者という事が関連していると思われます。

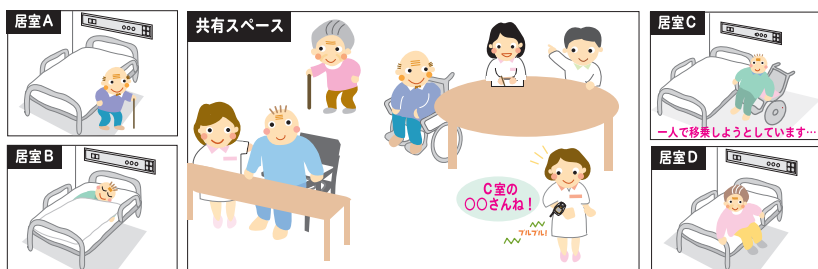


当社調べ

転倒・転落の発生場所は居室が約70%と圧倒的に高く、他にもトイレ、廊下、食堂などでも発生しています。転倒・転落事故の多くは居室=ベッド周りで起こっていますが、これは自立歩行困難である利用者が単独で行動した結果を表しています。



### 個室の中で起きる転倒・転落事故にはどう対策をすれば良いのでしょうか？



ユニット型施設は個室と共有空間を分ける事により、利用者に対しプライバシーの保護や手厚い介護ができる反面、個室などの死角が多くなりスタッフの目が届きにくい課題があると言われています。

そこで、スタッフの目の代わりになるのが『離床センサー』です。離床センサーを使用する事で、個室の利用者の動きを知ることができるので、事故が起こる前に介助することができます。

例) C室で介助が必要な入居者が一人で車いすからベッドへ移乗しようとしているところを、共有スペースにいるスタッフが感知。

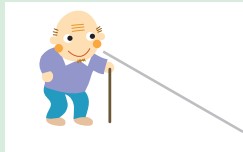


### どういった対象者にどのセンサーが適合するのか考えてみましょう！

#### ■高齢者施設における離床センサーの運用例

##### 転倒危険レベルⅠ 歩行自立レベル

平坦な場所での杖による立位、歩行は安定している。段差がある場所や夜間など照明のない環境での歩行には注意を要する。



適合するセンサー

階段(エレベーター)の前、勝手口への出入りや、夜間の徘徊行動を検知したい



コールマットで玄関から出ようとするをお知らせ



コールマットでエレベーターの前に来たことをお知らせ



赤外線コールで部屋の出入りをお知らせ

##### 転倒危険レベルⅡ 歩行介助レベル

立位・歩行は特に問題ないが移乗などに不安要素があるため、介助を要する。介助者がいない時に単独で行動した場合の転倒リスクは高い。



適合するセンサー

ベッドから離床するタイミングを検知したい



コールマットでベッドから降りようとするをお知らせ



サイドコールでベッドの端に寄りかかるとお知らせ



赤外線コールでベッドから降りようとするをお知らせ

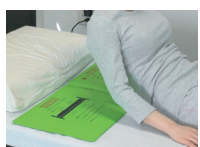
##### 転倒危険レベルⅢ 車いすレベル

筋力低下のため、立位・歩行ともに安定せず、移動手段は車いす。転倒の危険度は非常に高く、特に単独の移乗行動には注意を要する。

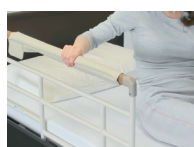


適合するセンサー

ベッド上で行動を開始した時点、車いすから移乗するタイミングを検知したい



ベッドコールでベッド上で起き上がろうとするをお知らせ



タッチコールで起き上がろうと柵を握るとお知らせ



座コールでベッドへ移乗しようとする車いすから立ち上がるとお知らせ